

5月 月例集会講話

○読書のこと

始業式で私は、『学力の基礎は読解力である。読解力を高めるには、多くの書物、本、文章を読んで自然と読解力を身に付けよう。また、「読解力」という文字をひらくと、「読み解く力」になる。身に付けた読解力から、「時代を読み解く力」、「社会を読み解く力」、「世界を読み解く力」を身に付けてほしい。本校では「読み解く力」を身に付けて「地球規模で思考のできる人材の育成」を大きな目標にしたい。』とお話しました。また、入学式の式辞では「万巻の書を読む」、「万里の道を行く」、「四方の友と交わる」という言葉を紹介しました。

さて、人は一生にどのくらいの数の本が読めるのか、「万巻の書」、仮に一万冊の本は読めると思いますか？

私は、中学生の時に読んだ本に、角川書店をつくった角川源義が、ある本の中に女学生が「目がつづれるまで本を読みたい」という書きつけがあった、そこからだれでも気軽に読める文庫本を作ろうと決心し、角川文庫をつくったということが紹介されていました。

私もある時、一生のうちどのくらい本が読めるのか、数えてみようと思って、中学1年の時から読んだ本のリストを作り、百冊ごとに1枚のレポート用紙にまとめることにしました。今もそれを続けています。そして、今年の4月の末に8300冊目を読み終わりました。

50年で8300冊、単純計算すると、1年で約160冊です。最近は読む量が少なくなりましたが、中学生・高校生の頃は、毎年200冊以上読んでいた記憶があります。このままのペースでいくと、あと10年、74歳くらいで一万冊になる予定です。60年以上かかることになりませんが、できないことはありません。「万巻の書を読む」。ぜひたくさん本を読んでください。

生きることは学ぶこと、学ぶこととは生涯にわたって、学ぶ意欲を持ち続けるということが必要です。しかし、単に多くの本を読んだだけでは頭でっかちになってしまいます。

本から得たものをどう生かすか、「生きる力」に変えるには、「万里の道を行く」、様々な体験的な活動からその知識を生きる力に変えていくことが大切です。4月にはグローバルコース高校1年生のフィリピンセブ島での語学研修、中学1年生のHR合宿を既に実施しましたが、そこでの体験を生かしてほしいと思います。

今日はもう1つ、文化の相互交流についてお話しします。

○日本にやってきた習慣

今年のNHK大河ドラマ「どうする家康」で、今川義元を演じた狂言師野村萬斎さんのお父さん、狂言師で人間国宝の野村万作さんから私は以前、直接聞いた話ですが、狂言をやっていて、困るのは、間を取るときに客席から拍手が入ってしまうことで、演じる間が取れず、勘が狂ってしまうと嘆かれています。

江戸時代が終わるまで日本では、演劇をはじめ観衆には拍手をする習慣がありませんでした。歌舞伎では芝居の見せ場で、大向う＝芝居の上手・下手を見分ける常連さんたちが「待ってました」、「高麗屋」、「成田屋」などの掛け声をするだけだったのです。

では、拍手の習慣はいつから始まったのかというと、近代、明治時代になってからのことです。大森貝塚を発見し、縄文時代研究のきっかけを作った、東京大学のお雇い外国人教授で、アメリカ人のエドワード・S・モースたちでした。

彼の日本での生活記録「日本その日その日（「Japan Day by Day」）などにそのことが書かれてい

ます。このことは、縄文時代を研究してきた考古学者の佐原真さんから直接伺いました。

モースに限らず、明治時代の日本にやってきた外国人たちが、様々な場面で拍手をするようになるとともに、慶應義塾の創立者福沢諭吉が「Speech スピーチ」という単語を「演説」と訳して日本語にして、演説とくに自由民権運動など政治演説会場から拍手の習慣化が始まり、定着していったようです。しかし、スタンディングオベーションのような、観客が感動したときに立ち上がって拍手をすることは、日本ではあまりやっていないようです。

○外国語になった日本の言葉

弁当は、英語で何といいますか？「LUNCH-BOX」かなとも思っていたのですが、英語の授業ではテキストで「BENTO」が扱われているものもあります。

英語・フランス語の辞書に載っているそうです。イギリスのOxford Dictionary of English (ODE) という辞書には、見出し語で「Bento」があり、その説明文では、
a lacquered or decorated wooden Japanese lunch box

漆を塗ったり、装飾をするなどした日本の木でできたランチボックスである。さらに、「米、野菜、刺身などを詰める」という説明があります。

また、皆さんも小さい頃、作ってもらった事があるかもしれませんが、漫画やテレビアニメなどの「キャラクター」を利用した「キャラ弁」も英語で「Kyaraben」と、そのまま紹介されていました。これはイギリスのBBCのテレビ放送のレポートで取り上げられていました。私が見たのは「トトロ」のお握りでした。

英語だけでなく、中国、台湾でも弁当の字は違いますが、そのまま通じます。弁当のほかにも外国でそのまま通じる日本の言葉があります。カブキ、スキヤキ、スシ、テンプラ、ラーメン、カラオケなどはすでにお馴染みですが、歴史用語の将軍、大名もそのまま英語になります。鎌倉、室町、江戸の幕府のことは「Shogunate ショーグネイト」という言葉になります。他に、もったいない、渋い、かわいい、盆栽、布団、黒潮、交番など色々ありますから自分で調べてみてください。

○異なる文化の相互交流

「彼を知り、己を知れば、百戦して危うからず」とは孫子の兵法で有名な言葉です。戦いにおいて、敵と味方のことを熟知していれば負ける心配はないということです。

戦いに限らず、異なる文化の相手との交流・交渉では、まず、「自分を知る」、広げて「自分の国のことを知る」というのは簡単なようで、なかなか難しいことです。まずは自分の拠って立つところをきちんと理解することが必要です。その上でそのことを相手に理解してもらい、相手だけでも、自分だけでもダメで、お互いのことを深く知る必要があります。このようにお互いの文化にないものを受け入れたり、積極的に交流していく姿勢はこれからもっと活発になるでしょう。

本校では、この後も様々な形で外国に研修に行ったり、また外国の高校生が本校にやってきたりする機会があります。その折には、相手の拠って立つ文化や歴史をよく理解したうえで交流することが大切であると考えます。